

# St. Luke's International University Repository

## Curriculum Evaluation at St.Luke's College of Nursing.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小山, 真理子, 平林, 優子, 南川, 雅子, 香春, 知永, 菊田, 文夫, 深谷, 計子, 木村, 登紀子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/370">http://hdl.handle.net/10285/370</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 聖路加看護大学におけるカリキュラム評価

小山真理子<sup>1)</sup> 平林 優子<sup>2)</sup> 南川 雅子<sup>3)</sup> 香春 知永<sup>4)</sup>  
 菊田 文夫<sup>5)</sup> 深谷 計子<sup>6)</sup> 木村登紀子<sup>7)</sup>

(1997, 1998, 1999年度カリキュラム評価委員会)

### 要 旨

聖路加看護大学では1995年4月より新カリキュラムが開始され、カリキュラムの進行とともにカリキュラム評価を多面的に実施し、1999年度はそのデータ分析に全学的取り組みを行った。カリキュラム評価の枠組みにはシステムモデルを応用し、「事前評価」「カリキュラム進行中の評価」「カリキュラム終了時(卒業時)の評価」、さらに「卒業後の評価」について「学習者」「教師」「カリキュラム」「環境」の視点から、学生と教員および臨床スタッフなどによる事前、形成および総括評価を行った。事前評価としては、入学生を対象に質問紙調査を、またカリキュラム進行中の形成評価としては、実習科目以外の科目評価を授業終了時の全学生に対して質問紙を用いて行った。実習科目については、学生と臨床スタッフに対して質問紙調査を実施した。教員は、カリキュラムの実際の運用およびその自己評価を行い、毎学期末のカリキュラム評価会で全教員がそれらを共有し、意見交換を行った。さらに、科目について「評価の視点」に基づいた評価記録を各科目担当者が提出し、カリキュラム評価の資料とした。カリキュラム完成年度の総括評価は、(1)カリキュラム全体に対する満足度評価と、(2)卒業時の特性に関する評価を卒業直前の4年生を対象に質問紙調査をした。卒業後の評価については、1999年度より1つのグループが活動を開始し計画中である。教員による総括評価は、専任教員はカリキュラム評価会でグループ討議を行い、非常勤講師にはアンケートによる評価を実施した。

カリキュラム評価を成功させるための取り組みとしては、1) 全学の教員の評価活動への参加、2) カリキュラム評価委員会の設置と役割の明確化、3) カリキュラムや評価を理解するための教員研修会、4) 専門家からの意見の聴取、5) 看護教育カリキュラム評価の専門家を招聘してのカリキュラム評価セミナーなどを行った。

### キーワード

カリキュラム, 評価, 看護学教育, 大学, 学習者

## I. はじめに

聖路加看護大学では1995年4月より新しく統合カリ

キュラムを開始し<sup>1)</sup>、1999年3月に第1回生が卒業した。カリキュラムは適時に評価しつつ改善すべきところは改善するという考えのもとに、学生と教員の両者による形成評価を毎学期実施し、さらに1999年3月には総括評価を行った。

新カリキュラムを1クール終了した現在、今までのデータを整理しつつ、全学的にカリキュラム評価に取り組んでいる。本学のカリキュラム評価は多面的に実施され、膨大なデータ量であるために、専任教員全員が6グループに分かれてデータ分析などの作業を行っており、その結果は今後、紀要等で報告する予定であ

- 1) 聖路加看護大学教授 (看護教育学)
- 2) 聖路加看護大学助教授 (小児看護学)
- 3) 聖路加看護大学講師 (老人看護学)
- 4) 聖路加看護大学助教授 (基礎看護学)
- 5) 聖路加看護大学助教授 (健康科学)
- 6) 聖路加看護大学助教授 (英語)
- 7) 聖路加看護大学教授 (心理学)

る。それに先立ち、本稿では本学のカリキュラム評価の全体像について、評価の枠組み、プロセス、評価を成功させるための取り組みなどについてその概要を報告する。

## II. 聖路加看護大学におけるカリキュラム評価の経過

本学におけるカリキュラム評価は表2に示すように、新カリキュラムの進行とともに発展してきた。1995年4月より、新カリキュラムが学部の新1年生に適用されるにあたって、新カリキュラムの評価をどのようにすればよいのかについて、カリキュラム委員会で、小委員会を設けて議論を重ねた。その結果、新カリキュラムのもとで開講される実習科目を含めたすべての講義、演習、実習科目について、前期と後期それぞれの終了時に学生に対する質問紙調査を実施することが提案された。これは、新カリキュラムの目指した目標が個々の科目で展開される講義、演習、実習に具現化されているのかを確かめる手がかりとなり、新カリキュラムの評価に必要であると考えられたからである。しかし、この年は質問紙のあり方を模索しており、大学としての科目評価は行っていない。1995年度のカ

リキュラム評価としては、新カリキュラムを実施したことについてのカリキュラム報告会を毎学期末に1日かけて実施し、以後これは継続して行われた。

1996年6月には、カリキュラム委員会に評価分科会を組織し、科目評価の質問紙の作成に着手した。質問項目を作成するにあたっては、できるだけ具体的な表現を用いながら、さまざまな視点からの質問がなされるよう配慮した。この質問紙を用いて、全教科の科目評価を各学期末に行った。

1997年度に入ると、学内にカリキュラム評価委員会(以下、評価委員会)が独立して組織され、4名(教養科目の教員1名、看護専門科目の教員3名)の委員が任命された。以後、この評価委員会が中心になり、評価活動の企画、運営を進めてきた。

## III. カリキュラム評価の枠組み

カリキュラム評価は何を評価するのかにより、評価の視点も評価方法も全く異なってくる。本学では、長年かけて改正した新カリキュラムが効果的であるのかどうか、改善すべき点はあるのかを主として評価していくことになった。その目的を達成するために適切と思われる評価の枠組み(表1)が評価委員会からカリ

表1 カリキュラム評価の枠組み

	INPUT 事前	PROCESS 実施中	OUTPUT 終了時	卒業後の評価
学 習 者	学習者のニード 学習者の事前能力	学習者の満足感 ・教育内容、方法 ・施設 レベル目標達成度 科目評価 実習評価	A. 学習者の評価 (カリキュラム全体に対する満足感 など) B. 卒業時の特性(教育目標)の達成度	* 卒業生の評価 * 勤務先の上司の評価
教 師	教師の質 ・知識、技術、 教授方法 教師の数	教授法の適切性 教員の労力	C. 教師の評価 (カリキュラム全体に対する満足感 など)	
カリキュラム	卒業生の特性 (教育目的) レベル目標 (教科・単元目標)	レベル目標の適切性 ・学年 ・教科 ・単元 学習経験の適切性	D. 科目間・科目群の内容の関連	
環 境	資源 教材 施設—当該機関 利用施設	資源の活用性 カリキュラム評価会	E. 追加すべき資源の必要性	
			F. 全体評価	

↑  
形成評価

↑  
総括評価

\* 検討中

表2 聖路加看護大学のカリキュラム評価の経過

年 月	活 動	評 価 の 実 施
1995.4月 新カリキュラム開始 7月 9月 1996.3月	カリキュラム委員会でカリキュラム評価の小委員会の委員選出	カリキュラム報告会（前期） カリキュラム報告会（後期）
1996.4月 新カリキュラム（2年目） 6月 7月 8月 9月 12月 1997.2月 3月	カリキュラム評価のプロセスの合意を得る カリキュラム委員会評価分科会委員決定 カリキュラム評価計画案(学生, 教員) カリキュラム評価科目（学生へのアンケート）提案 教授会へ提案→承認, 評価開始 教員による科目ならびに授業評価の視点提案 →カリキュラム評価会資料作成  1996年度前期科目評価の検討(カリキュラム委員会)	1996年度前期科目評価(新カリ1,2年生・旧カリ3,4年生)  カリキュラム評価会（前期）  1996年度後期科目評価（全学生） カリキュラム評価会（後期）
1997.4月 新カリキュラム（3年目） 第1回学士編入生入学 7月 9月 10月 12月 1998.2月 3月	カリキュラム評価委員会設置 カリキュラム評価委員会より, 1997年度科目評価表・カリキュラム評価依頼文提案承認 各教科資料を一部保管することに決定 教員による科目ならびに授業評価の視点フォーマットにより提出（10/1）することに決定 学士編入生のカリキュラムについてのアンケート作成 →一部手直しし実施 教員研修会「新カリキュラムの教育方法」  実習の科目評価(案)検討開始  実習科目評価案—学生, 教員, 臨床スタッフへのアンケート依頼を決定 実習科目評価表作成  実習評価開始	1997年度前期科目評価 学士編入生にカリキュラムについてのアンケート実施 →次年度のカリキュラム一部変更  カリキュラム評価会（前期）  1997年度後期科目評価 臨床実習（A～F科目）評価（学生, 臨床スタッフ） カリキュラム評価会（後期）
1998.4月 新カリキュラム（4年目） 7月 9月 10月 12月 1999.1月 2月 3月 新カリキュラムでの初めての卒業生	カリキュラム委員会, カリキュラム評価委員会合同の臨時委員会開催 ・カリキュラム評価委員会の位置づけ確認 ・カリキュラム評価の計画 教員研修会「本学のカリキュラムについて」 カリキュラム委員会で評価検討グループとして3グループ編成  「卒業生の特性」に関するアンケート提案 教員による総合看護の評価提案 学習者「卒業時のアンケート」案 教員研修会「カリキュラム評価について」 教員による評価 ①単位認定者への質問紙調査 ②非常勤講師への質問紙調査  広島大学の高等教育研究センターでの研修（評価委員）	臨床実習G科目評価（学生, 臨床スタッフ） 総合実習評価（学生, 臨床スタッフ） 1998年度前期科目評価（学生） カリキュラム評価会（前期）  総合実習評価（教員）  臨床実習（A～F科目）評価（学生, 臨床スタッフ） 1998年度後期科目評価 卒業時の評価 カリキュラム評価会（後期） （教員によるカリキュラムの総括評価）
1999.4月 新カリキュラム（5年目） 5月 7月 9月 12月	全教員が6グループに分かれてカリキュラムの評価を行うことが決定 ①学生による科目評価 ②卒業生の特性評価 ③卒業時の学生によるカリキュラム評価 ④教員によるカリキュラム評価 ⑤卒業後の評価の検討 ⑥学習者のニーズ, 事前能力の評価  招聘講師によるカリキュラム評価のワークショップ  教員研修会「カリキュラム評価の改善案について」	新入生への事前評価 総合実習評価（学生, 臨床スタッフ） 臨床実習G科目評価 （学生, 臨床スタッフ） 1999年度前期科目評価 カリキュラム評価会（前期）

キュラム委員会へ提案、承認された。

これは、システムモデルを応用してホルツマー<sup>2)</sup>らが開発し、小山ら<sup>3)</sup>が修正した看護継続教育プログラムの評価の枠組みを応用したものである。この枠組みでは、横軸に「いつ評価するか」という時系列をおき、カリキュラムを受ける前の状態を「事前評価」とし、「カリキュラム進行中の評価」、さらに「カリキュラム終了時(卒業時)の評価」、さらに「卒業後の評価」となっている。縦軸には「何を、または誰が評価するのか」の視点から、「学習者」「教師」「カリキュラム」「環境」が設定されている。これは、カリキュラムを評価する主体として、学習者と教師の両者からの評価が重要であること、また、カリキュラムの運用には、学習資源や経済的な環境も重要であることを意味している。

評価委員会は、この枠組みの縦軸と横軸を常に意識しながら「いつ、何をどのように評価するのか」を考え、妥当な評価方法と測定用具案を検討してきた。この枠組みはまた、全学的に「今、評価のどこを実施しているのか」を明確に知る指標としても用いられている。

#### IV. 聖路加看護大学におけるカリキュラム評価の実際

##### 1. 事前評価

評価の枠組みの事前評価に該当する部分における「学習者」については入学試験の結果、高校での履修科目及び成績、入学時の動機などが含まれる。入試の成績や高校の履修科目については、すでにデータがあるために改めてデータ収集は行っていない。しかし、高校の指導要領改正により理科系科目の履修が自由選択になったことで、看護学を学んでいくには最低必要であると考えられる知識の準備がない学生の増加が話題となっていた。そこで、カリキュラム委員会での検討により、学生の準備状態を改めて把握することが決定された。これを受けて、1つのグループの教員がデータ収集を行い、現在分析を行っている。

事前評価の中で、「教師」の枠で評価されるのは、カリキュラム開始年度の教師の数、職位などである。また、「カリキュラム」については、提供されているカリキュラムの内容や組み方等の記録がデータになる。

##### 2. カリキュラム進行中の評価

###### 1) 学習者による科目評価(実習を除く)

カリキュラム委員会評価分科会で度重なる議論の結果、作成された質問項目群は、カリキュラム委員

表3 学生による科目評価で用いた評価項目

1. この科目の学習目標は、わかりやすく示されていた。
2. 1回ずつの授業の時間配分は、内容から考えて適切だった。
3. 全般的に、この科目の内容は十分理解できた。
4. この科目を受講して、系統的に考えることのできる枠組みを得ることができた。
5. この科目を受講して、ものごとに対して疑問や問題意識をもつことができるようになった。
6. 全体をとおして、教授方法は良かった。
7. この科目の理解を助けるような教材(テキスト、スライド、OHP、模型、資料等)が適切に活用されていた。
8. この科目は、全体をとおしてひと続きのまとまりのある内容として教えられていた。
9. この科目の学習内容は興味深かった。
10. この科目の内容を今後も深く学習し続けたい。
11. この科目で課せられた課題を達成するために、課外の時間を使った。
12. この科目で課せられた課題は科目の内容の理解を深めるのに役立った。
13. この科目を受講して、あなたはどれくらい満足しましたか。
14. その他、この科目を履修して気がついたことを、裏面にご自由にお書きください。

会での議論を経て教授会で承認され、1996年度前期、後期終了時には、表3の11と12を除いた12質問項目による質問紙調査を、学生に対して、無記名で、回答を強制しないという条件のもとで実施した。

翌1997年4月には、前年度実施した質問紙を評価委員会が検討し、さらに表3に示した11と12の質問項目を加える必要があると考え、これらを加えた14質問項目に科目評価質問紙を改訂した。「学習者による科目評価」は、この質問紙を用いて現在も継続して実施している。

###### 2) 学習者による実習評価

実習科目についても新しいカリキュラムの理念が具現化されているかについて、学習者からの意見に基づいた評価を行う必要がある。そこで1997年度より、学習者による実習科目の評価質問紙について評価委員会が検討を重ねた。カリキュラム委員会および教授会の議を経て、1997年度は、表4にあげた12の質問項目および表5にあげた臨地実習全般を振り返っての評価5項目を含む実習評価質問紙を作成した。これを用いて、全ての臨地実習を終了した学生に、無記名で、回答の強制をしないという条件の下で、質問紙調査を実施し、学習者による実習の評価とした。なお、1998年度からは表4に示す実習評価票により、各実習領域が終了するごとに調査し、現

表4 学生による実習評価で用いた評価項目

1. この実習の学習目標は、わかりやすく示されていた。
2. 今までに学んだ内容を統合しながら実習できた。
3. この実習を通して、ものごとに対して疑問や問題意識をもつことができるようになった。
4. 実習期間および時間は、実習の目標を達成するのに十分であった。
5. 実習場所の環境や受け入れ体制は良かった。
6. 教員から適切な指導・援助を受けることができた。
7. 必要な時には、看護婦や医師等から指導・援助を受けることができた。
8. 実習での課題（記録・レポート等）は、実習目標を達成するために、役立った。
9. 実習時間以外で実習の準備・課題に要した一日の平均時間はどの位ですか。
10. 実習前に必ず準備しておいた方がよかったと思われる知識・技術があったらお書きください。
11. この実習を終了して、あなたはどれくらい満足しましたか。
12. 今回の実習について何かご意見があればお書き下さい。

表5 学習者による臨地実習全般についての評価

[臨地実習A・B・C・D・E・F全体を振り返ってお書き下さい]

1. 同一のメンバーでA～Fまでの実習を行うのは、あなたにとって納得のいくものであった。
2. 実習科目の順序（まわり方）は、効果的であった。
3. 実習と実習との間隔は、適当な長さであった。
4. 実習科目を積み重ねて経験していくうちに、自分なりの看護観の形成ができた。
5. 実習全体を通して気が付いたことや、ご意見などがあればご自由にお書き下さい。

在も継続している。

### 3) 学習者による実習評価

本学では、新カリキュラム開始後2年目に、専門科目が急増した2年生がかなり負担を感じているようであることがカリキュラム委員会で話題となり、評価分科会の教員数名が、2年生に呼びかけてヒアリングを行った。その結果、上級生からの情報が全くないこと、これからの見通しがつかないことがストレスになっていることが判明し、次年度より、年度初めに教務から実施される学生へのカリキュラムの説明を最終学年までにおよぶ見直しを含めてより具体的に行うことが決定された。

また、学士編入学が開始された1997年には、評価委員会からの提案により、できるだけ多くの学生の

意見が反映されるように、学士編入学への自由記載法による質問紙調査を実施した。その結果はカリキュラム委員会で、次年度の学士編入学のカリキュラムの検討資料として役立てた。

### 4) 教員・実習指導スタッフによる評価

#### (1) カリキュラム評価会

新しいカリキュラムが、具体的に各科目でどのような内容でどのように運営されているかについて、学内の全教員で共有し、意見を交換することを目的として新カリキュラム開始年度(1995年度)から完成年度(1998年度)までの間、各学期末に「カリキュラム評価会」を実施した。この評価会は学校全体の取り組みとして位置づけられ、年度当初に日程が決められ、一日の予定で、教員全員の参加としている。当初は「評価」という用語に抵抗をおぼえる教員もあり、「カリキュラム報告会」としていたが、目的が明確に意識されるに従って「カリキュラム評価会」と変更された。

発表内容は原則として表6および表7に示されるような評価の視点に基づいて行われ、全体討議でカリキュラムとしての位置づけや科目の役割の確認、改善策などが話し合われた。限られた時間の中での発表・検討になるため、カリキュラム評価会で発表する科目・実習は学年の進行とともに新たに開始された科目にしぼった。

#### (2) 教員による科目・実習評価

カリキュラム評価会で発表された新科目も含め、開講された全科目について、毎年、表6、7に示す「評価の視点」に基づいて、各科目担当者が評価記録を提出し、カリキュラム評価の資料としている。

#### (3) 実習指導スタッフによる実習についての評価

看護教育に重要な位置づけである実習の運営、方法、内容について、学生を指導したスタッフはどのように評価しているのか、解決すべき問題はあるのかについてスタッフに質問紙調査を実習終了時に行った。できるだけ内容が把握できるようにと、他の質問紙と異なり自由記載の欄を多く設けた。この評価票は各実習領域の担当者が結果を検討し、次回の実習に役立てるように形成評価として用いている。

### 5) 授業ファイルの作成と共有

新しいカリキュラムで、各科目担当者が授業を計画するにあたっては、学生の先行学習を把握することが必要であった。シラバスだけでは詳細がわかりにくいこと、先行科目の授業担当者が複数存在するので問い合わせることの煩雑さの問題などが、評価委員会で明らかにされた。カリキュラム評価の目的に、結果を評価するだけでなく、学生や教師にとってカリキュラムの運営が円滑に進められているか

表6 教員による科目ならびに授業の評価の視点

<p><b>【科目評価】</b></p> <p>1. 科目の計画・準備</p> <p>1) 科目の目標・ねらい (適切性・明確性・達成可能性など)</p> <p>2) 科目の内容と構成</p> <p>科目の下位目標と内容</p> <p>科目の割り振り・順序性</p> <p>科目内容と教員の分担</p> <p>2. 実施</p> <p>前述した目標・内容についてどのような方法で展開したか</p> <p>3. 評価</p> <p>・他科目との関係性・バランスについての評価</p> <p>・担当したユニット (いくつかの授業のかたまり) に関する評価</p> <p>目標 (科目目標, ユニットの目標, 各授業の目標との関連から) の達成状況について評価する。</p> <p>・科目全体としての目標達成状況に関する評価 (試験など客観的な評価を含む)</p> <p>・今後の課題</p> <p><b>【担当した授業の評価】</b></p> <p>1. 科目の計画・準備</p> <p>1) 科目における担当授業の位置づけ</p> <p>2) 担当授業の目標</p> <p>2. 実施</p> <p>1) 授業内容・教材</p> <p>2) 授業形態と方法</p> <p>3) 授業評価</p> <p>3. 評価</p> <p>担当授業の評価 (満足度)</p> <p>1) 内容と教材</p> <p>2) 授業形態と方法</p> <p>3) 授業評価に対する評価</p> <p>4) 今後の課題</p>
---

否かも評価し、改善していくすべを考えることも含まれる。評価委員会で前述の問題を検討した結果、授業内容を共有することにより、後に続く科目の授業計画に役立てることを目的として、各教科の配布資料についてのファイルを教員全員が閲覧できるように保管することをカリキュラム委員会に提案し、承認された。

### 3. カリキュラム完成年度の評価

4年間のカリキュラム終了時の評価として、以下のような評価を実施した。それぞれの評価については、専任教員がグループを作り、評価方法を検討して実施から分析までを行った。詳しい評価方法および結果に

表7 教員による実習評価の視点

<p>1. 実習目標</p> <p>2. 実習の計画・準備</p> <p>[実習場への説明や準備, 学生の準備など]</p> <p>3. 実習の内容</p> <p>[具体的目標 (実習レベルの考慮), 実施内容, 受け持ち, 導体制 (指導方法, 教員と現場スタッフの役割など), 実習スケジュール, 記録や課題など]</p> <p>4. 評価内容と方法及び評価結果</p> <p>[学生の自己評価, 成績のための評価, 受け入れ側からの評価 (評価方法と内容), 担当実習レベルの達成度の評価に関してどのような配慮をしたかなど]</p> <p>5. 実習を実施しての評価</p> <p>[実習目標 (実習レベルとの関連) について, 実習の計画・準備について, 実習の内容, 評価方法について, 学生からのフィードバック, 旧カリキュラムとの比較 (教科目との関連づけ等を含む), 今後の課題, カリキュラム全体についての要望, 討議して欲しい内容など]</p> <p>※ [ ] 内は評価の視点例。</p>
---

については、それぞれのグループの結果報告に譲るが、以下に述べる評価方法と内容については、これらの分析結果を報告し全体で討議する目的で開催された1999年9月21日のカリキュラム評価会や、各グループの検討をふまえて現在も修正・改善中であることを付記しておく。

#### 1) 学習者による評価

##### (1) カリキュラム全体に対する満足度評価

1995年より開始されたカリキュラムを4年間修了した、1999年3月に卒業する学生全員 (該当年には学士編入生は含まれてない) を対象として、卒業直前にカリキュラムの満足度に関するアンケートを実施した。主な調査内容は、①学習科目, 学習資源, 行事・課外活動等, カリキュラム全体に関する満足度, ②科目の順序性, 統合性に関する認識である。したがって、これらの評価には、本学が評価の視点として使用した枠組みの「カリキュラム」「環境」の評価も含まれていることになる。

##### (2) 卒業時の特性に関する評価

上記の調査と同時に、卒業時に本学の学生が身につけていることを期待している特性7項目について、新カリキュラムを終え、卒業を目前にした4年生の学生がどのように認識しているか、質問紙調査を実施した。調査の主な内容は次の2点である。①学生自身が、卒業時点で期待される特性をどの程度身につけていると考えているか、②学生は、それら

の特性がカリキュラムにどれくらい学習内容として含まれていたと認識しているか、についてである。各々について15項目の質問紙を用いて調査した。

### (3) 卒業生による評価

本学のカリキュラムを修了して看護職に就いた者がその後社会でどのような活動・働きをしているのかを明らかにすることを、今回のカリキュラムの一つの評価項目に加えることにし、1999年度より1つのグループが活動を開始した。

現在検討中の案としては、卒業後1年、5年、10年程度を目安とし、質問紙調査を実施することである。主な検討中の内容としては、①卒業生の動向を含めた実態調査、②卒業生による主観的な特性評価、③卒業生からみたカリキュラム評価などがある。なお、卒業生が所属する職場の管理者からの評価も合わせて卒業生によるカリキュラム評価とする予定である。

### 2) 教員による評価

1999年3月に開催された専任教員によるカリキュラム評価会では、グループディスカッションにより、下記のa~cに関する評価が実施された。また、非常勤講師には、アンケートによる評価を実施した。これらのデータは評価担当グループによる分析・報告がなされた。

- a. 科目評価：①科目のくくりは適切か、②科目配置は適切か、③科目の順序性は適切か、④不足している科目・内容はないか
- b. カリキュラム運用上の評価：①教員数、②図書・教材・教育設備品、③教育環境等
- c. 教員の満足度：①チームティーチングについて、②負担度、③担当を希望する科目か、等の主観的評価

学習者からの評価と同様、今回の評価には、評価の視点となるマトリックス中の「カリキュラム」「環境」の評価も含まれていることになる。

### 3) 他者からの評価

卒業後の評価を検討するにあたり、第3者からの評価を得ることで、今回のカリキュラムを修了した卒業生が期待される資質を持っているかを評価することとした。さらに、卒業生が所属する職場の管理者に協力を得ての質問紙調査も検討している。

### 4) 全体を振り返っての評価

1999年3月には、新カリキュラムを1クール終了するにあたり、従来の評価会に加えて、全体を振り返っての問題点などについて教員間で意見交換を行った。

また、同年9月のカリキュラム評価会においては、6つの全グループの専任教員が担当グループにおけ

る分析結果や経過を報告し合う場を設けた。複数の視点から評価が行われることによって、評価方法、その他の課題が明らかになり、また短期的、長期的にカリキュラムの見直しが必要となる内容などが検討された。これらの結果には、担当科目で改善する内容、科目間・あるいは科目群やその構成などについて調整が必要な内容、カリキュラムを提供する環境等様々な内容が含まれていた。

同年12月の教員研修会では、Faculty Development委員会と評価委員会の合同の企画・運営により、3月と9月のカリキュラム評価会で検討された課題について、短期目標として解決すべき問題について具体的な解決策を検討した。

## V. カリキュラム評価を成功させるための取り組み

### 1. 全学的な取り組み

カリキュラム評価を成功させるには、評価は評価委員会だけが行うのではなく、教育に従事する教師一人ひとりが教育の実践と評価に責任があるという意識をもつことが大切である。本学では、長年にわたり全学的な取り組みがなされてきた。

全学的な取り組みをするための環境づくりとして、大学としてのカリキュラム評価のために多大な時間が確保されてきた。全学的な話し合いや検討のための度重なる会議、每学期末の評価会、教員全員参加の数日におよぶ研修が可能であった理由には、次のいくつかの点が挙げられる。

第1に、10年以上の歳月をかけて、統合カリキュラムという新しいカリキュラムを計画し実施してきたので、このような試みの是非を検討するには、カリキュラム評価が、重要な位置づけとなっていた。

第2に、本学は全学生300余名、専任教員が50余名というきわめて小規模であったので、物理的に全学規模の活動がしやすいことである。理念の共通理解にはじまりカリキュラムの運用においても随時チームティーチングの話し合いがもたれたり、時間割の調整や学生の進度の申し送りなどが行われ、日常的に、カリキュラムを共有するための検討や調整を行っていた。

第3には、以前から、実習評価など教員が学生について他の領域の教員と合同で評価を行う風土があり、自分たちの行った教育活動について、その評価を行うこと、それを合議によって行うことを当然と受け止める教員が多かったことなどである。

### 2. カリキュラム評価委員会の設置と役割の明確化

前述した全学的な取り組みは、カリキュラム評価を



成功させる要因ではあるが、全学的な取り組みだけで評価活動が成功する訳ではない。全学的取り組みを円滑に進めるために企画・運営するコアとなる組織が必要である。

本学では当初の2年間は、カリキュラム評価はカリキュラム委員会の責任と位置づけ、委員会の中で分科会を設置し、分科会の数名が企画案を作成するなど活動してきた。1997年度にカリキュラム評価委員会が設置されてから、本学のカリキュラム評価活動は再検討され、より多面的な活動が行われたと考えられる。

しかし、カリキュラム評価委員会の活動が活発化するとともに、評価活動の決定について責任の所在が不明瞭になってきた。そこで、カリキュラム委員会と評価委員会の位置づけは以下のように決定された。

カリキュラム評価についての責任と決定はカリキュラム委員会であり、評価委員会などから提案される評価のための企画や調査用紙類は全てカリキュラム委員会の承認を得ることとした。

評価委員会の役割は、次の通りである。

#### (1) 評価活動の企画と評価方法の提案

- ①カリキュラム評価方法に関する全体枠の案をカリキュラム委員会に提出する
- ②科目・実習評価のための質問紙の作成と修正
- ③カリキュラム報告会など、カリキュラム評価に関わる行事の企画と運営
- ④科目・実習評価に関して、カリキュラム委員会で検討する科目をスクリーニングするための項目とその規準案の作成
- ⑤科目・実習評価の分析案の作成
- ⑥カリキュラム評価に関する改善案の提出

#### (2) カリキュラム評価活動の準備や手配・行事の運営

各授業科目の評価に関するデータ収集および入力手配は教務部と協力して実施している。

#### (3) 授業での配布物のファイルの管理

以上のように役割を明確にしてから、評価委員会活動の方向性も明確になり、より活動しやすくなった。コアとなる委員会の設置と役割の明確化は、カリキュラム評価を進めていく上で非常に重要である。

### 3. FD(Faculty Development)委員会企画による教員研修会

新しいカリキュラムを運用していくにあたって、カリキュラム開始後に本学に就任した教員を含めて、新カリキュラムについての理解を深めるニーズは高かった。そのため、1回5時間程度の教員研修会を全教員参加のもとに1997年7月、1998年7月、12月の3回、FD委員会が企画し、FD委員会と評価委員会の合同運営により開催された。

第1回は、「新カリキュラムになって試みたさまざまな教育方法」のテーマのもとに全教員がグループに分かれてグループディスカッション、全体討議が行なわれた。各グループでは、それぞれが実施した教授方法をもちより、その方法を用いた目的、実際の展開方法、今後の課題について話し合われた。

第2、3回は、教員が統合カリキュラムの全体像をより理解することを目的とし、①卒業時の特性からみたカリキュラム②実習科目群のカリキュラム③カリキュラムとその基本理念④総合科目(対人関係論)の4側面から、グループディスカッションを行った。

これらの研修会に加えて、年2回のカリキュラム評価会により、全教員が本学のカリキュラムとカリキュラム評価への関心と理解を深めた。

### 4. 本学のカリキュラム評価についての専門家の意見の聴取

新カリキュラム開始以来、本学のカリキュラム評価の概念枠組みにそって評価を進めてきたが、その評価方法の妥当性について外部からの客観的意見を得るために、1999年3月、評価委員会では広島大学大学教育研究センターの高等教育研究の専門家の意見を求めた。センターの教授・助教授各1名から、カリキュラム評価について、次のような説明があった。

#### ①カリキュラム評価の概念の明確化の重要性

- ・顕在的カリキュラムか潜在的カリキュラムか
- ・学生にとってのカリキュラムか教員にとってのカリキュラムであるのか
- ・教室内のことか学生の生活全体に広げるのか

#### ②カリキュラムの評価方法のあり方の選択

- ・経験科学的手法—解釈科学的手法
- ・内部評価—外部評価
- ・形成的評価—総括的評価
- ・目標以外に達成させたものを含めるゴール・フリー評価
- ・学生が選択したプログラムに照準を当てたポート・フォリオ評価
- ・カリキュラムを作成から評価に至るまで全体的システムとして見るシステム的评价

次に本学のカリキュラム評価について、以下のような点が指摘された。

#### ①データ分析について

- ・数量化されたデータだけの分析ではなく、質的なデータと照合しながら評価を行う必要がある。

#### ②評価者について

- ・教員は各自の担当科目は評価できるがプログラム全体の評価は難しい。

- ・プログラム全体の視野を持っており具体的な評価が可能である学生による評価が重要である。

③データ収集方法について

- ・学生へのインタビュー、ヒアリングは効果的である。
- ・外部評価に依頼する項目は内部評価でできない点であり、評価者は類似の大学、高校、専門分野（看護）から得ることができる。

④評価の影響要因について

- ・高校のカリキュラムの変更による学生の変化
- ・教員の負担度および満足度
- ・科目特性

また、新カリキュラム終了時点の評価を直接改革に移すのではなく、形成評価をしながら部分的に修正可能な点を改善していくこと、継続評価することの重要性を強調された。

## 5. 看護教育カリキュラム評価の専門家を招聘してのカリキュラム評価セミナー

1999年7月26日～30日にかけて、米国看護連盟（NLN）看護教育評価部門所属のヴァリガ氏（Theresa M. Valiga, R.N., Ed.D.）を招聘し、カリキュラム評価に関するセミナーを全専任教員参加により開催した。この招聘には聖路加国際メディカルセンターアメリカンカウンシルの援助を受けた。ヴァリガ氏は、前任はフェアフィールド大学の看護学部長であり、米国の看護教育カリキュラム評価における第一人者でもある。

セミナーの目標は、本学教員がカリキュラム評価を効果的に適切に実施するために看護カリキュラム評価について米国の例を中心に学ぶ機会を持つこと、さらに現在実施している評価方法の検討に具体的なアドバイスを得ることであった。

セミナーは以下のような2つの構成となった。

①カリキュラム評価に関連する講義

「看護基礎教育におけるカリキュラム評価」「フェアフィールド大学の紹介とカリキュラム構想」「フェアフィールド大学のカリキュラム評価」という3題の講義が行われた。これらの講義は、米国における看護基礎教育のカリキュラム評価の理念や方法、全体像を学び、組織的にカリキュラム評価にとり組み、高く評価されているフェアフィールド大学の具体的な運営を知ることによって、本学におけるカリキュラム評価の実施に役立てる目的で構成された。

さらに、聖路加国際病院看護管理者らも参加し、「米国における基礎教育のカリキュラム変革と実践の質」というテーマで講義が行われた。

②評価グループのコンサルテーション

学内の6つのカリキュラム評価グループが、さらに適切なカリキュラム評価の方法を検討、分析するために、それまで実施していた評価方法および結果の分析についてのコンサルテーションを受けた。

さらに、学内全体のカリキュラム評価運営について組織的に実施するため、学部長およびカリキュラム評価委員会が中心となりコンサルテーションを受け、その際、カリキュラム評価への学生の参加や、各カリキュラム評価の分担の方法、評価結果を検討する機関など決定しておく必要性などの示唆を得た。

さらに、各グループがコンサルテーションで得た内容を全学で共有するための発表会を設けた。

## VI. おわりに

本学の新カリキュラムのカリキュラム評価は以上述べてきたように多面的に実施され、全学的な取り組みの中で進行中である。本学の特徴は、カリキュラムの教科担当者だけではなく、大学全体のカリキュラムとしてどのようにあれば良いかを、全ての教員で検討しようとする取り組みを行っていることにある。グループに分かれて作業した結果は、大学全体会で意見交換している。1999年12月には、今までの評価の積み重ねにより、ここ1～2年以内に取り組む必要があると思われる優先順位の高い課題を挙げ、それらの解決法について教員全体で話し合った。今後、各グループの分析結果をふまえ、短期的に解決すべき問題に加えて、長期的に改善すべきことも検討していきたいと考えている。

現在、カリキュラム評価に教員が多大なエネルギーを注いでいる感がある。今後、教員の負担を最小限にしつつもカリキュラムを適切に評価していくシステムづくりが課題である。また、教師にも学生にも負担が少なく、しかし学生の評価を的確に把握するための評価の測定用具の精選も課題である。

カリキュラム評価はカリキュラムが1クール終了した時点で1回行うのではなく、カリキュラムが続く限り続けていくものである。本学のカリキュラム評価もより良いカリキュラムを目指して、これからも続けていきたいと考えている。

## 引用文献

- 1) 菱沼典子他.聖路加看護大学1995年度改訂カリキュラムについて,聖路加看護大学紀要,22,113-121,1996.
- 2) Holzemer,William L.:Evaluation methods in continuing education.The Journal of Continuing Education in Nursing,19(4),148-157,1988.
- 3) Koyama,Mariko,Holzemer,William L.,Kaharu,Chie,etc.:Assessment of continuing education evaluation framework. The Journal of Continuing Education in Nursing,27(3),115-119,1996.

---

## Abstract

---

# Curriculum Evaluation at St.Luke's College of Nursing

Mariko Koyama<sup>1)</sup>, Yuko Hirabayashi<sup>1)</sup>, Masako Minamikawa<sup>1)</sup>, Chie Kaharu<sup>1)</sup>,  
Fumio Kikuta<sup>1)</sup>, Keiko Fukaya<sup>1)</sup>, Tokiko Kimura<sup>1)</sup>

An integrated nursing curriculum was newly implemented at St.Luke's College of Nursing in Tokyo, Japan, in April 1995. Upon implementation, curriculum committee decided to evaluate the effects of the new curriculum. The conceptual framework for evaluating the curriculum consisting of the learner, teacher, curriculum, and the setting along with a systems model was used as an organizing framework. The data from the freshmen was gathered by questionnaire as input data. For the process evaluation, the course evaluation by students using a questionnaire was implemented upon completion of each courses. The course evaluation by all the faculty members was also done. For the output evaluation, the questionnaires were written by students one day before the graduation day, to measure their satisfaction for the overall curriculum and their competency level along with the characteristics of the graduates at St.Luke's College of Nursing.

Several efforts have been made to lead curriculum evaluation for success such as the involvement of all the full time faculty members in the analysis of the data, faculty development seminars to understand integrated curriculum and the curriculum evaluation, and receiving professional advice on curriculum evaluation.

## Key words

curriculum, evaluation, nursing education, baccalaureate program, learner

---

1) St. Luke's College of Nursing